

# 道元禪師の入越後の動靜

伊 藤 秀 憲

道元禪師の北越入山後の動靜については、従来、大仏寺が建立されるまでは、吉峯寺と禪師峯との間を往来していたとされてきた。これに対して、中世古祥道氏は、『正法眼蔵』

の奥書を整理し、『正法眼蔵』の示衆と侍者位にあって禪師に常随していた懷奘の書写の年月日と場所とを検討することにより、先ず禪師は吉峯寺に入られ、十一月半ばより翌年正月月上旬までを禪師峯で過され、その後また吉峯寺へ戻られたとの説を発表された(『道元禪師伝研究』三六三～三六八頁)。筆者も『正法眼蔵』撰述示衆年代考(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三九号)において、中世古説に賛同したのであるが、しかし、禪師峯と吉峯寺との間を頻繁に往来していたとする従来の説が、まだ支持されているようである。それは、多くの写本に当れば当るほど、その奥書の記述内容が余りにも異なり、示衆の場所が両寺の間を交錯していることによるのである。本稿では、『永平正法眼蔵蒐書大成』所収の三二二本(第一～一〇・二四・二五卷の『正法眼蔵』写本、及び第一五～二

三卷の弁註・那一宝・參註・傍註・祖山本(巻目列次)・秘鈔・傍訓)の奥書を検討することにより、北越入山後一年間の道元禪師の動靜を、改めて見てみることにしたい。

次頁の表は、道元禪師の『正法眼蔵』の示衆と、懷奘の書写を、諸本の記すまま、年次に排列したものである。( )内は写本等の数、或いは略称である。( )はこの部分を欠く本もあることを、「( )」は理解の便を考えての筆者の補い、※は奥書に誤りのあることを示す。

三界唯心 奥書には、示衆場所を禪師峯頭とするものと、吉峯頭とするものの二種があるが、吉峯頭と見るべきであろう。それは、第一に、二日後には吉峯寺院主房にて、常に禪師に隨身していた懷奘が「栢樹子」の書写を行っているからである。第二に、「栢樹子」「一顆明珠」の書写場所が吉峯寺院主房と明記されているのは、示衆場所(興聖寺)とは異なるからで、これらと同じ場所での書写と考えられる。「三界唯心」の書写奥書に、院主房とのみあって吉峯寺の名が冠せら

月 日	示衆／書写	場 所
寛元元年 (7月以前で、吉峯寺での示衆とするものは、誤りであるので表から省く)		
閏 7. 1	三界 (29)	禪師峯頭 (17) 禪寺峯頭 (1) 吉峯頭 (10) 峯頭 (1)
3	栢樹 (10)	吉峯寺院主房
23	一顛 (18)	吉峯寺院主房
25	三界 (7)	院主坊 (4) 院主房 (3)
9. 16	仏道 (29)	吉峯寺 (28) 吉峯 (1)
20	密語 (27)	吉峯古精舎 (19) 吉峯精舎 (3) 吉峯寺 (5)
24	嗣書 (16)	吉峯古寺草庵
26	※仏道 (玉潭)	吉峯寺
9. 一	諸法 (26)	吉峯寺 (18) 吉峯山 (6) 吉峯精舎 (2)
9. 一	仏経 (20)	吉峯寺 (18) 吉峯古寺 (1) 吉峯 (1)
10. 2	無情 (29)	吉峯古寺 (24) 吉峯寺 (5)
15	無情 (10)	(場所不記)
16	密語 (秘蜜)	同〔吉峯古〕精舎侍司
20	面授 (28)	吉峯精舎
20	洗面 (15)	吉峯寺 (12) 吉峯精舎 (3)
20	別洗面 (10)	吉峯精舎
21	※洗面 (大乘・秘鈔)	吉峯寺
23	嗣書(校合)(秘蜜)(越州)	
23	※洗面 (玉潭)	吉峯精舎
23	仏道 (秘蜜)	(場所不記)
28	※無情 (玉潭)	吉峯古寺
10. 一	法性 (29)	吉峯精舎 (17) 吉峯古精舎 (11) 吉峯古寺 (1)
11. 6	梅華 (27)	吉峯寺 (17) 吉嶺寺 (10)
13	十方 (26)	吉峯精舎
11. 一	坐儀 (24)	吉峯精舎
11. 一	坐箴 (6)	吉峯精舎
是歳	説心 (29)	吉峯寺 (26) 吉峯 (2) 吉峯古寺 (1)
"	陀羅 (29)	吉峯精舎 (25) 吉峯寺 (3) 吉峯古寺 (1)
"	※優曇 (玉潭)	吉峯精藍
11. 19	見仏 (29)	禪師峯山 (26) 禪師峯 (2) 禪師峯下 (1)
20	※面授 (長見)	吉峯精舎
20	※遍参 (秘鈔)	禪師峯下茅庵
23	※遍参 (傍訓)	禪師峯下茅庵
27	遍参 (28)	禪師峯下茅庵 (26) ※吉峯下之芝庵 (長見・傍註)
12. 3	※坐箴 (永沢・弁註)	吉峯精舎
5	※龍吟 (玉潭)	禪師峯下
17	眼睛 (28)	禪師峯 (之) 下
17	家常 (27)	禪師峯下 (26) 禪師峯 (1)
25	龍吟 (28)	禪師峯 (16) 禪師峯下 (12)

25 ※三昧(玉潭)	吉峯精舍
27 ※家常(玉潭・他2本)	禪師峯下
27 ※祖師(玉潭)	越宇深山裏
27 遍参(11)	同〔禪師峯下茅〕庵〈之〉侍者寮(9) ※同〔吉峯下之茅〕庵侍者寮(長見・傍註)
28 ※堯無(玉潭)	吉峯精舍
28 眼睛(9)	同〔禪師〕峯下侍者寮(6) 当山侍司寮裏(3)
29 ※眼睛(玉潭)	禪師峰下
12.一 ※諸法(弁註)	吉峯寺
12.一 ※堯菩(指月・玉潭)	吉峯精舍
12.一 ※分法(玉潭)	吉峯精舍
寛元二年	
1. 1 家常(9)	〈同〕〔禪師〕峯下侍者寮(7) 侍司寮(2)
11 説心(秘蜜)	〔吉峯〕寺侍者寮下
13 陀羅(9)	吉〈峯〕庵下侍司寮(8) 吉峯庵下侍者寮(1)
20 坐儀(妙昌)	吉峯庵侍者寮
20 授記(10)	吉峯寺侍〈者〕寮
27 大悟(15)	吉峯古寺(13) 吉峯寺(2)
27 ※大悟(8)	吉峯精舍堂奥(4) 吉峯精舍(4)
27 空華(9)	吉峯寺侍者寮
2. 1 ※神通(永沢)	観音導利興聖宝林寺
1 神通(9)	吉峯侍者寮
4 祖師(27)	(越宇, 越州) 深山裏〈峯〕(吉峯寺と考える)
12 優曇(25)	吉峯精藍(12) 吉峯精舍(6) 吉峯精舍藍(6) 峯精舍藍(1)
14 堯無(28)	吉峯精舍(27) 峯精舍(1)
14 堯菩(9)	吉峯精舍
15 如来(23)	吉峯精舍
15 三昧(28)	吉峯精舍(27) 吉峯古寺(秘蜜)
15 三昧(秘蜜)	同〔吉〕峯下侍者寮
16 ※安居(正徳・永徳)	吉峯精舍
18 ※自証(3)	吉峯精舍
24 分法(27)	吉峯精舍
24 ※転法(昌伝)	吉峯精舍
27 転法(27)	吉峯精舍
28 自証(13)	吉峯精舍
29 自証(12)	吉峯精舍
3. 1 転法(秘蜜)	同〔吉峯〕精舍侍者寮
3 葛藤(10)	吉峯寺〈之〕侍司〈寮〕(9) 吉祥寺侍司(1)
6 ※大修(玉潭)	吉峯古精舍

9	大修 (27)	吉峯古精舎 (20) 吉峯精舎 (7)
9	※虚空 (玉潭)	大仏寺
9	分法 (6)	同〔吉〕峯下侍司
13	大修 (秘蜜)	同〔吉峯〕精舎侍者寮
20	大悟 (10)	吉峯精舎堂奥
21	摩訶 (12)	吉峯精舎侍司 (8) 吉峯精舎侍者寮 (3) 吉峯精舎 (1)
4.12	自証 (秘蜜)	吉峯下侍者寮
14	※鉢孟 (玉潭)	大仏精舎
5.12	古仏 (11)	吉峯庵下侍司 (寮)
14	仏祖 (秘蜜)	吉峯寺侍司
6. 3	山水 (秘蜜)	吉峯寺侍司
7	※面授 (宝慶)	吉峯精舎
7	面授 (秘蜜)	吉峯精舎侍者寮
是歳	春秋 (26)	(越宇) 山奥 (越宇深山裏と同じで、吉峯寺と考える)

10.16	見仏 (8)	大仏寺侍者寮
12. 3	光明 (10)	大仏寺侍司

寛元三年 (この歳に、吉峯寺での示衆とするものは、誤りであるので表から省く)

3. 6	虚空 (26)	大仏寺
12	鉢孟 (28)	大仏精舎
6.13	安居 (25)	大仏寺

れていないのは、示衆と書写とが同じ所 (吉峯寺) で行なわれたからと考えられる。第三に、峯頭が「峯の上、山頭のほとり」という意味であるということからである。禪師峯の方は、「見仏」に禪師峯山とする他は禪師峯下とあり、禪師峯の麓であることを表わしている。それは、『建徳記』の「平泉寺麓禪師峯ト申ス所ニテ…」(瑞長本)とも一致する。一方吉峯寺は、吉峯(古)寺・吉峯(古)精舎・吉峯庵とある。書写奥書に同峯下侍者寮・吉峯下侍者寮とあるが、示衆奥書と対照すれば明らかなように、これらは吉峯精舎下の意味であって、峯の麓の意味ではない。むしろ、『三大尊行状記』義介伝の「寛元々年冬、殊雪深、八町曲坂担料桶供三二時粥飯。」という記述からして、八町(約八七〇m)ほど曲り坂を登ったところに吉峯寺があったことがわかる。以上の点より、最初に入られたのは禪師峯ではなく吉峯寺であり、「三界唯心」はそこで示衆されたと考えるべきであろう。

仏教 安居 神通 虚空 鉢孟 十方 如来全身 密語  
これらの巻は、左記の示衆日と場所とを記す奥書をもつが、下に示すように、史実と照合すれば明らかに誤りである。

仁治三年	九月	仏経 (10)	吉峯寺
寛元元年	二月一六日	安居 (2)	吉峯寺
二年	二月一日	神通 (永沢)	興聖寺
三月	九日	虚空 (玉潭)	大仏寺
四月一四日	鉢孟 (玉潭)		大仏寺

三年 八月二十四日十方(玉潭)

吉峯寺

一〇月一五日如来(玉潭・傍訓) 吉峯寺―大仏寺時代

二〇日密語(玉潭)

吉峯寺

なお、「安居」の永平寺正徳四年本・永徳寺本は、寛元二年の二月一六日示衆とするが、諸本は寛元三年六月一三日であるから、これを採るべきであろう。また、「神通」は、仁治二年一月一六日興聖寺で示衆されており、懷奘書写日と混同したものである。右の表から明らかなように、玉潭本の奥書は誤りが多く、信憑性の低いものである。

仏道 洗面 無情説法 優雲華 龍吟 三昧王三昧 家常

祖師西来意 発無上心 発菩提心 眼睛 三十七品菩提分

法 大修行 以上は、玉潭本、或いはそれと他の一・二本

のみ異なった示衆日のものであるが、それらは誤写や誤りであろう。例えば、「発無心上」(西国高祖曰)は玉潭本のみが、「発菩提心」(おほよそ、心三種あり…)は玉潭本と他の一本のみが特異な示衆日で、他は寛元二年二月一四日であるから、この日を探るべきであろう。また、玉潭本は「眼睛」を寛元元年二月二十九日示衆とするが、前日同巻の書写が行なわれているから誤りである。

面授 遍参 坐禅箴 諸法実相 転法輪 「面授」は長見

寺本と宝慶寺本、「遍参」は秘鈔と傍訓、「坐禅箴」は弁註と

永沢寺本、「諸法実相」は弁註、「転法輪」は昌伝寺本のみが

道元禪師の入越後の動静(伊藤)

特異な示衆日の奥書をもっており、これらは、玉潭本の場合と同様、誤りと考えるべきであろう。なお、「面授」の宝慶寺本が寛元二年六月七日示衆とするのは、秘密本に寛元元年一〇月二〇日示衆、同二年六月七日懷奘書写の奥書があるから、懷奘書写日を示衆日と誤ったものである。また、「遍参」の長見寺本・傍註に吉峯下之茅庵とあるのは、他本が記すように、禪師峯下茅庵の誤りであろう。

大悟 拙稿で論じたように、寛元二年一月二七日書写は、同日の示衆の奥書と、三月二〇日吉峯精舍堂奥における書写の奥書とを混同したものであって、三月二〇日が正しい。

自証三昧 寛元二年二月一八日とするものが三本、二八日が一本、二九日が二本ある。一八日は二八日の誤写とも考えられるが、二八日か二九日かは決定し難い。いずれにしても、吉峯寺での示衆である。

以上、「正法眼蔵」諸写本等の奥書を見てきたが、表から※を付けた誤った奥書をもつものを除けば、道元禪師は、北越入山後一月半ばまでは吉峯寺に、その後翌年一月上旬まで禪師峯にいて、再び吉峯寺へ戻られたことは明らかであり、二寺の間を頻繁に往来していたとする従来の説は、奥書を整理検討しなかったため、誤りであると言える。

(駒沢大学講師)